

# 教宣 せぶん

## あの森にはトラがいる !?

先日、契約係の先輩と久しぶりにゆっくり話す機会がありました。すると耳を疑うような話しをしていました。「年末に行われたオルグで、『全損保に所属する人たちはどうするんでしょうね。訴訟をしても勝ち目はない。ついている弁護士も勝ち目のない訴訟に尻込みしていて、できれば訴訟を引き受けたくないと思っている』と言っていた。また違う場では、『全損保の組合員は一人4人、労組から組合員を引き連れてこいというノルマがかけられていて、コンタクトを取ろうとしてくるので気をつける』という指示が出ていた」などです。先輩はつい最近まで同じ釜の飯を食べていた仲間を敵視するその場の雰囲気嫌気をもったそうです。

また、首都圏では全損保に戻りたいと思っている者に対して、戻れば「代理店になっても自分の保有が引き継げない。わかっていますか？」とプレッシャーをかける電話が色々な方面からかかってきたそうです。

西東京のRA支社長の不当労働行為がどぶいたニュースで大きく取りあげられました。この時期、こうした動きをどう見ればよいのでしょうか？

分裂前の外勤支部の組織運営のなかでも、「特社の採用が閉ざされる」「会社が交渉のテーブルから立ち去ってしまう」など、制度の将来を左右する大事な場面で、こういう言葉が使われてきました。もっと強くたたかおうとすると、決まって「展望」が破壊されるというメッセージが流されました。ちょうど、村人が自分の住む村から飛び出して、近くにある森に行こうとすると、ムラ長や権力者から、『やめておけ。あの森にはトラがいて、近づくと食べられてしまう』と言われるのによく似ています。村人はその言葉に最初は自重しますが、食物がなくなり、命がけで森に入る決心をします。すると、その森にはトラなどはいず、豊富な食物がありました。

いかがでしょう？ムラ長や権力者はその森に豊富な食料があることを知っていて、村人が近づかないように、森に人食いの凶暴なトラを登場させた方が、村の運営に都合が良いのです。

会社は数年後に「抜本改革」と称する大リストラを敢行しようと目論んでいます。旧日勤社の内勤従業員を中心に大ナタを振るうことが容易に想像されます。その時に、眠っている多くの村人に森に行かれては大変です。だから、私たちが森に行ったことを注目されては困るのです。森に行った結果、私たちが無事に帰ってきては困るのです。森に豊富な食物があるという事実を知ってもらっては困るのです。

前号にも、「事実」と、知らされている「情報」の違いについて書きましたが、私たちが訴訟に打って出たこの時期を境に、また色々な憶測や情報が飛び交うのでしょうか。しかし、事実はひとつしかありません。固定観念にとらわれず、広い視野で「事実」を知る努力がいま求められています。

最後にこんな事実を知っていますか？ 実は私たちの前にその森に出かけた同じ村に住む仲間がいたのです。その村人はすでに4回も森に出かけていました。3回はたっぷりの食物を森から村に持ち帰っていますし、1回も森から村に食物は持ち帰れませんでした。ムラ長はその村人に食物を与えざるを得ませんでした。もちろん村人は4回ともトラに襲われずに帰ってきています。私たちはどうしてこの事実を知らなかったのでしょうか？